

第1回

新宿区次世代育成協議会

平成21年7月1日(水)

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

1 開会

事務局

開会挨拶

中山会長

この次世代育成協議会は、17年度から青少年問題協議会を発展させる形で次世代育成支援対策推進法に基づいて設置をした。この協議会も4年を経て、今日は第3期協議会の第1回となる。

新宿区次世代育成支援計画の前期計画は、今年度で実は最終年度を迎えている。この第3期協議会の1年目に当たる今年度は、これにつながる後期の新宿区次世代育成支援計画の策定に取り組む。

昨年度実施をした次世代育成支援に関する調査、新宿区が「子育てしやすいまち」だと思う人の割合が、平成15年度には就学前児童保護者は24.7%、小学生の保護者は16.6%。これを5年後、21年度には32%、21%まで上げる目標値を持った。これが20年度実施した調査で、目標数値を上回るという結果が出た。今後も新宿区がより「子育てしやすいまち」と実感していただけるように、区民の皆さんと手を携えてより一層取り組んでまいりたい。

この協議会は今年度、そうした具体的な非常に大きな課題を持って運営をする。協議会を通じて委員の皆様には活発な御意見をいただき、後期の新宿区次世代育成支援計画が新宿のまちの現実や課題に即応できる計画となるよう、策定と計画が順調に進行するよう努めてまいりたい。どうか皆様、よろしく願いしたい。

事務局

定足数確認

資料確認

2 委員委嘱

事務局

委員委嘱の説明

3 副会長の選任

中山会長

新宿区次世代育成協議会条例第5条第2項に基づき、副会長を互選により選任する。

推薦がなかったため、会長（区長）から学識経験者である福富護委員を副会長とすることを提案し、拍手にて委員の承認を得た。

4 第3期新宿区次世代育成協議会委員紹介（自己紹介）

中山会長

第3期新宿区次世代育成協議会委員の紹介に進む。本日は第3期の初回の協議会であるので、各委員の皆様にご自己紹介をお願いしたい。時間が限られているので、簡単にお名前と所属、何か一言ということであればということでお話しいただきたい。

名前と所属、簡単に本会議への抱負など自己紹介を行なった。

中山会長

今日御欠席の方もいらっしゃるが、今期のメンバー、色々な所でこれからもコミュニケーションをとっていただけたらと思う。

5 新宿区次世代育成協議会の概要について 資料1

中山会長

次第の5、新宿区次世代育成協議会の概要について、事務局から説明をする。

事務局

新宿区民が安心して子どもを産み育てることができ、子どもが心身ともに健やかに育つ環境を整備するとともに、青少年の健全な成長を支える地域社会を実現するために必要な施策の総合的かつ効果的な推進を図るため、区長の附属機関として、この新宿区次世代育成協議会を設置している。

所掌事務については、次世代育成支援に関する重要な事項について協議をするもののほか、次世代育成支援施策の推進を図るために必要な事項について、区長及び区内の関係行政機関に対し意見を述べるができる。

組織は、会長及び委員43名以内をもって組織する。現在会長を含めて43名の委員構成となっている。会長は区長をもって充てる。

委員は、次の各号に掲げる者につき、各号に掲げる委員数以内を区長が委嘱し、任命する。1から7までの分野の中から人数があるが、この中で構成するとなっている。委員の任期は2年で、再任は妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合における補欠の委員の任期は前任者の残任任期となる。

会長及び副会長の責務は、会長は協議会を代表し、会務を総理する。また、協議会には副会長を置き、委員の互選によってこれを定める。先ほど福富護先生に、副会長をお引き受けいただいた。副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、または会長が欠けたときに代理をする。

この協議会は会長である区長が招集をする。

委員の定足数は、半数以上の出席がなければ会議は開くことができず、協議をして決するときは出席委員の過半数で決する。可否同数のときは会長が決する。会議は公開である。ただし、会長が必要と認めたときは非公開とすることができる。

また、必要がある場合は委員以外の方に協議会へ御出席していただき意見をお聞きすることができる。

この協議会には必要に応じて部会を置くことができる。部会は会長が指名する委員をもって組織し、部会には部会長を置く。

この条例の施行に関してまた必要なものが生じたら、区長が別に定める。

6 平成21年度新宿区次世代育成協議会・部会について 資料2

中山会長

平成21年度新宿区次世代育成協議会、部会について事務局から説明する。

事務局

第2期の部会は、テーマを「子どもの虐待防止と地域の役割」と定め、6回の検討の中で一定の御提言をいただいた。第3期は、次世代育成支援計画について御協議をいただくものとして設置をさせていただきたい。まず、そのことについて御了承をお願いした上で、資料2をごらんいただきたい。

事務局のほうで会長と相談し、今日は部会の構成員の名簿の案を御提示させていただいている。学識経験者の福富護先生と増田まゆみ先生、区民公募の3人の委員の方、民生児童委員協議会、区立小学校PTA連合会、区立中学校PTA協議会、大久保地区青少年育成委員会、区立幼稚園PTA連合会、学童クラブ連絡協議会、障害児関係団体とし、区民のそれぞれ

れの分野の委員の代表の方に御参加をいただきたく、案を持ってきた。そして、一番下であるが、区立保育園の園長会ということで、保育園については保護者会等の大きな組織がない中で、保育園の現場について御意見をいただくため、園長が代表で出ているので、加えさせていただいた。

中山会長

今年度、まず第1年度目の課題として、後期の次世代育成支援計画の策定を進めていく上で、部会の活動をかなり活発にやっていただくことが必要である。各分野の方々に御参加をいただき、部会として検討したものをこの協議会に持ってきていただくということで、このような形でお願いできたらという案でお諮りをしたいと思う。

皆様、御質問でも結構だが、御意見いただけたらと思う。

青少年育成委員会の委員の皆様は各地区お一人ずつ10名おられるわけだが、部会に加わっていただく方は、恐縮だが1名で案はつくらせていただいている。

この部会については、部会長は学識経験者の福富先生にお願いしたいと考えている。

皆様、どうぞ御意見、または御質問等があったら、十分御意見をお聞きして、それでここでスタートを切りたいと思うが、いかがか。

それでは、御異議がないようなら、新宿区次世代育成協議会条例の第9条に基づき、部会の構成員をここに定める。

7 新宿区次世代育成支援事業の進捗状況について 資料3

中山会長

新宿区次世代育成支援事業の進捗状況について、事務局から説明する。

事務局

この協議会では次世代育成支援計画の進捗状況管理ということで、毎年進捗状況について説明をさせていただいている。本日は第3期の1回目ということで、進捗状況だけでなく、新宿区の次世代育成支援計画全体について簡単に説明をさせていただき、その後進捗状況の説明に入る。

次世代育成支援計画は、次世代育成支援対策推進法に基づく市町村の行動計画としてすべての自治体に策定が義務づけられているものである。この法律が10年間の時限立法ということで、前期5年、後期5年の計画をそれぞれ自治体では作成している。

8ページをごらんいただきたい。計画全体としては、総合ビジョン「子育てコミュニティ

タウン新宿」を掲げており、それを支える3つの柱として、「子育てを応援する人とサービスが豊富なまち」、「都市の利便性が子育てに活きているまち」、「支えあいの子育てから新しい出会いと世代を超えた交流が生まれるまち」ということで、家庭や地域、区の協働の輪が広がって、みんなで見守って、みんなで子育てを応援していこうということを発信している。

10ページをごらんいただきたい。5番の基本目標である。区長のあいさつの中にもあったが、この計画は、「子育てしやすいまち」を実現することによって、新宿区で子どもを産み育てたい人が増えていくことを目指すということで、具体的な数値目標を掲げた。昨年の調査では、それぞれ32%、21%という、就学前児童の保護者の方、小学生の保護者の方が新宿区を「子育てしやすいまち」と思う方の割合、これが大きく上回って、新宿区を「子育てしやすいまち」と思ってくれる方が増えてきている状況が見てとれた。

その次は、いろいろな子どもを取り巻く状況で、さまざまなデータを載せている。

18ページをごらんいただきたい。ここでは、新宿区の次世代育成支援をめぐる課題と方向性を整理して、幾つかの特徴、課題を抜き出した。いろいろ求められるものがあるだろうということを前提に、8番の施策目標につなげている。

施策目標を進めていく上での基本的な視点として、真ん中の楕円のところに「子どもの権利を大切にし、子どもの幸せを第一に考える視点」、「家庭の多様なあり方を尊重する視点」、「子育てを社会全体で支援する視点」、「サービスの質の向上と効果的な提供をめざす視点」を掲げた。そういう中で5つの目標を掲げた。

目標1が「子どもの生きる力と豊かな心を育てます」、少子化対策や子育て支援というのが、親の子育て支援というだけではなく、第一に子どもの育成が大きなものであるということで目標1を定めている。

目標2が「きめこまやかなサービスですべての子育て家庭をサポートします」、在宅で子育てをしている家庭の育児の負担感がやはり大きいということが課題として出てきている中で、すべての家庭をサポートすることを掲げている。

目標3が「子育てと仕事の両立がしやすい環境づくりを進めます」。

目標4が「家庭・地域の子育て力・教育力をアップします」、子育て支援というのは行政だけではできないもので、既に地域の皆様がいろんな活動をされているが、さらにそういう方が増えたり、行政もそれを支援していくということで、目標4が定められている。

目標5が「安心して子育てできる都市環境をつくります」、新宿では安全・安心に対する

不安もかなり多く、また決して自然が豊かな地域ではないので、地域性を考慮した都市環境、その中でも安心して子育てできる都市環境をつくろうということで、目標5を掲げている。

これらを具体化していくために、20ページの9番であるが、新宿区の次世代育成支援を着実に推進していくために、2つの会を設置するところを提案した。1つが新宿区次世代育成協議会の設置で、それに基づいてできているのがこの会である。

それから、もう1つが、子どもと家庭に関する施策を総合的に進める体制の整備で、ここでは仮称となっているが、既に動き始めており、子どもの虐待防止、不登校ゼロをめざす子ども学校サポートネットワーク、発達支援の部会という、3つに分かれていたものを統合して子ども家庭サポートネットワークというものをつくっている。今これについては地域でさまざまな課題のあるお子さんや御家庭がいらっしゃったときに、必要な関係者が集まって協議をし、支援の方策などを考えている。

21ページは施策の体系で、先ほど申し上げた5つの目標に施策がぶら下がっており、括弧で囲って吹き出しが出ているものを重点事業として進めてきた。

24ページからは、それぞれの目標に対して課題と今後の取り組みと主な事業を述べているものである。

最後に、80ページからが、主な事業というだけではなく、次世代育成に関してはさまざまな事業があるので、それを一通り載せているものがここから先の表である。

次世代育成支援計画は17年2月に策定をしており、その後新宿区では毎年、子どもに関する施策ではいろいろ進めてきた。昨年調査を実施するときに調査票と同封をして、新宿区第一次実行計画（概要版）を送らせていただいた。理由としては、新宿区ではこういう課題に対してこういうふうに取り組んで、具体的な取り組みとしてはこういうものがあるということをお理解いただくためにつくった。開いていただくと、最初は同じであるが、例えば5ページで、幼児教育のあり方に関する総合的な検討が必要ということに対して、こういう検討をして、具体的な取り組みとしては幼保の連携・一元化等を進めてきた、というふうに見ていただきたいとつくっているものであるので、合わせて見ていただければと思う。

次世代育成支援の事業についてどのように進んできたか、また20年度についての実績が資料3である。前置きが長くて申しわけないが、この進捗状況一覧の変わったところであるとか21年度の新規事業についてざっと御説明をさせていただく。

1ページ目は、5番、子ども家庭サポートネットワークが、子ども虐待防止ネットワークから発展して今動いている。

2 ページの 6 番、教育センターの教育相談のほかに、子どもが相談するツールとして、新宿子どもほっとラインがある。いじめにかかわる相談を面接及び電話で行い、右のほうに実績が載っている。

3 ページ目、21年度からの新規事業で、これから取り組むまたは取り組み始めているものであるが、キッズホームページの開設、それから未来を担うジュニアリーダーの育成が始まっている。

4 ページ目の21番、通常、子どもの計画は18歳までを対象年齢としているものが多い。新宿区の次世代育成支援の計画は、若者の自立まで視野に入れ、若者の自立をどのようにしていくかを課題に挙げ、その当時は自立応援プランの検討を挙げていた。現在は若者自立支援連絡会が動いており、既にさまざまなNPOの活動がある。これらが連携して、よりよい支援をしていただけるようなサポートをするとともに、昨年度、旧東戸山中学校の跡に仕事センターというものをつくり、若者の自立支援を考えていくというような動きもスタートしている。

6 ページ目の28番、幼稚園・保育園の連携・一元化では、幼保一元化の課題に取り組み、19年4月には四谷子ども園が開設をした。また、同じ年に愛日幼稚園と中町保育園の幼保連携ということで取り組んでいる。

7 ページ目の33番、子どもたちの遊び場・居場所の充実では、プレイパーク活動の支援をしている。区立戸山公園での区民の皆様の活動を支援するところからスタートして、現在では4団体5カ所でこの活動が展開されている。

8 ページ目の36番、みんなで考える身近な公園の整備では、児童遊園を地域の皆様や子どもたちと一緒に整備、計画段階から考えていくということで、現在4園が整備をされてきている。

それから37番、中高生にとっての魅力ある居場所づくりでは、中高生のための児童館のスペースということで榎町児童センターがあった。子ども家庭支援センターの開設の際に拡充していくということで、本年度は信濃町の児童館にもスペースが整備された。

9 ページ目の43番、放課後子どもひろばでは、学校の施設を利用して放課後に子ども達の自主的な遊びと学びの場を提供するというので、19年度に6カ所でスタートしたが、毎年6校ずつ設置をしており、23年度にはすべての学校で開設をする予定である。

15 ページ目の74番、区立幼稚園つどいのへやは、今年度の新規事業で、区立幼稚園の中で児童館と連携しながら子育てのひろば、親子の居場所づくりをする。これは今年度1園であ

るが、実施している。これは全園で実施するというのではなく、児童館や子ども家庭支援センター等が近くにない地域で、区立幼稚園も活用しながら行なう事業である。

17ページ目の80番、妊婦健康診査は、妊産婦の健康費の助成ということで行なっていた事業で、妊婦の健診で2万円の補助が8万円の補助になり、さらに御負担いただかないで窓口でも受診できるような受診券に変えていくという中で、妊娠期の健康支援をしていく事業に発展してきた。

19ページ目の86番、新生児訪問事業は、新生児訪問はこれまで行なっていたが、受診されない方もいらっしゃる中で、生後4カ月までの子育ての負担感というのはかなり大きいものがあるということで、4カ月までの乳児のいる家庭をきちんと訪問してケアをしていこうという事業が始まった。

20ページ目の91番、この計画を立てた時は障害児教育と言っていたが、19年度からは特別支援という枠組みに変わってきている。養護学校等も全部、特別支援学校という名前に変更され、障害児の教育については視点を変えた充実がされている。

21ページ目の93番、障害児等タイムケア事業は、障害を持つお子さんの放課後の居場所が19年4月から始まっている。現在は、三栄町保育園の跡で「まいペース」という名前で行っている事業である。

24ページ目、母子家庭の自立支援が課題になっており、111番では高等技能促進事業というのが一番右側にあるが、資格を取っていただき、よりよい就労に結びつくというような事業も立ち上がってきている。また、自立支援のプログラムを策定する相談員も配置して、よりきめ細かな支援をしている。

27ページ目の経済的な支援のところだが、訂正がある。125番、国の児童手当、事業内容で、「日本国内に住所があり、小学3年終了時までの」となっているが、現在では6年生にまでになっている。

126番、新宿区児童手当では、その6年生までに加えて中学校3年生まで、国の枠組みと同様の手当を18年4月から新宿区では行っている。

28ページ目の131番、子ども医療費助成が、現在では中学校3年生までになっている。

36ページ目の166番、今ワーク・ライフ・バランスが大分市民権を得ているいが、男女共同参画の推進から、さらに新宿区の企業のワーク・ライフ・バランスを応援しようということで新しい事業が始まっており、ここも訂正をお願いしたい。事業名、「新宿区子育て応援宣言企業」の認定となっているが、「ワーク・ライフ・バランス推進企業」の認定という名

前で現在、事業を行っている。

主なところを御紹介させていただいた。後ほどごらんになって、新宿区ではどのような施策が行われているか御理解いただき、今後、御議論をお願いしたいと思っているので、よろしくをお願いしたい。

中山会長

次世代育成支援というのは、区の組織でも各部にわたっている。それは、私たちの暮らし全般にわたるということでもある。それから区としてはこの次世代育成支援計画をつくるときに、子どもを真ん中に置きながら、家庭も地域も、あらゆる機関も、子育て支援ということとで互いに手を結んでいく、そういった施策対応をすることによって、子どもが健全に育ち、地域の持続的な発展につながる、そういったものをつくっていこうと取り組んできている。

この推進協議会では、事業の推進について皆さん方で情報を共有していただくとともに、推進の状況がどのようになっているかを、進行管理をしていただいたく役割も皆さんに持ってもらっている。

提供する情報のボリュームがあり、わかりにくいところもあるかと思うが、今の時点で御質問や御意見等あったらお受けする。また、皆様が後ほど持ち帰りいただいて、これはどうということなんだろうかということは、どうぞ遠慮なさらずに事務局のほうにお問い合わせ等をいただけることを願っている。よろしくをお願いしたい。

委員

2点、お話をさせていただく。

愛日幼稚園と中町保育園が幼保一貫教育ということで、今子ども園化の委員会のメンバーと一緒にやっているわけであるが、やっとどういう名前にするかということで、一応内定をさせていただいた。

そこで、園側の教育方針なんかは専門的な先生たちが一生懸命つくられたものだから、それはもう事細かく出ているが、施設の面が並行して議論されていないのかなと感じる。愛日幼稚園、保育園については、道路を挟んで愛日小学校という小学校があり、小学校には今旧講堂というか、全く使用されていない建物が校舎の右のほうにある。

今現状の箱の中で子ども園化して、結局ぎゅうぎゅうに詰め込まれた子どもたちが果たして幸せな園生活が送れるかということについては非常に疑問を感じる。幼稚園の上に体育館があるので、保育児、今ゼロ歳から預かっているということだから、お昼寝の時間になると上で体育館が使えなくなるとか。要するに、ドタバタすると子どもが起きちゃうということ

で。その辺のいろんな施設面のことでもうちょっとお話し合いをしていただけないか。

あるいは、ちょうど幼稚園、小学校の間の道は北町という町会の通りなのだが、非常に狭い車道で親が子どもたちを迎えているような状況で、非常に危険度がある。

そういうこと一つにしても、ただ一元化のことばかりでやるんじゃなく、施設面で、例えば隣の民家を買ってとかということじゃなく、たまたま小学校の中にはそういう利用できない建物があるので、そういうものをきちっと整理することによって、もしかしたら待機児童の問題にもかかわってくるかもわからないが、その施設がもうちょっといい施設になれば、今の枠よりはもっと多くの子どもたちも確保できるんじゃないかなというふうに、ちょっと素人考えで考えている。何かその辺がもうちょっと、学校側の教育の中身のことばかりじゃなく、施設の部分あるいは運営の部分で御協議を進めていただけないものかというお話をまずさせていただきたい。

それからもう一つは、先ほどいろんな進行状況を聞いたが、健常者の子どもたちについてはかなりいろいろ幅広く推進されてきていると思う。愛日小学校には、若竹学級という障害を持たれている学級がある。若竹のクラスじゃないが、健常者と同じ教室にいる子であるが、その子が3年生ぐらいまでは何とか1人で歩いてきたが、今5年生である。もう1人で歩く状況ではなくなっている。今どういう状況かという、過去は先生や周りの人が毎日背負って階段を上がって、あるいは階段をおりている。

この間、それも校長さんにお聞きしたら、教育委員会のほうから自動昇降機という。自動昇降機で電気なのだが、やっぱり大人が手を持って階段を1段1段上がるのである。それをしないと子どもはもう上に上がれないということで、もう5年生だから、当然今は4階に5年生は行っているが、まだ2階に5年生のクラスがある。そのクラスは2階とかという問題はいいが、私はそこで、普通なら4階に行くクラスが今1年生と一緒に2階にあるということは、その子どもをきちっと考えて生徒たちがきちっと理解をして、だから何々ちゃんがいるから2階でいいねという、そういう了解のもとに今2階にクラスがあるということである。

わずか1人2人という問題かもわからないが、それも施設のことにもかかわるのだろうが、何とか自動のそういうものが設置できないのか。あるいは、その子のために入れるということじゃなく、例えばその子が卒業した後、よその学校でそういうお子さんが入ったときに共有できるのではないかなというふうにちょっと想像する。だから、これもお金のかかることではあるが、そういう障害を持ったお子さんあるいはその家族の背景をよく見させていた

だいているが、本当にその御努力はなかなか言葉で言いあらわせるような状況ではないような気がしたし、たった1人じゃないかとかたった数人じゃないかという観点でなく、やっぱりそういう子どもたちにも、これだけ健常の子どもたちにいろんな幅広い支援策を考えている委員会なので、ぜひそんなことも含めて前向きに検討していただけないかなというふうに思って、2点をちょっとお話しさせていただいた。

中山会長

今の1点目の幼保一元化については、皆さん御存じかと思うが、幼保一元化をしてきている大きな目的は、子どもの発達に合った形で子どもに必要な保育、教育をする場所を新宿区は持ちたいということで、幼保一元化をできるところから行っている。今お話があったような教育の中身とあわせて、施設の面というのは一体的な非常に大きな課題でもある。

保育園は今は厚生労働省となっているが、昔でいえば厚生省の保育に欠ける子ども、幼稚園は今は文科省だが文部省の幼児教育施設という位置づけの中で、親が就労しているかしていないかにかかわらず、子どもにとっての必要な保育、教育を行えることということで取り組みを行ってきた。今いただいた御意見についても、それぞれに検討されていると思うが、現場がどうなっているのか、私も持ち帰り、十分検討させていただきたいと思う。

それから、2点目の障害を持った子どもへの対応についても、可能な限りの新宿区としては対応をしてまいりたい。1人のことというのは多くの人の問題でもあるということで取り組みをしていきたいと思っている。御意見を十分伺ったので、また対応できたところについては、どのようになったか御報告をさせていただきたいと思う。

委員

子どもの生きる力ということが随分うたわれているが、安全・安心ということばかりが非常にクローズアップされて、子どもたちを守ることばかりに何か力点が置かれ過ぎているような風潮を私は感じている。例えば、小学校6年生の、15、6人しかいないクラスで、3人ぐらい、例えば自転車に乗っちゃいけないと言われている。高学年になるとかなり行動範囲が広がるが、そういう子は歩いて行くことになる。自転車で行けば10分ぐらいだが、その子は行くのに20分ぐらいかかる。一緒に行きたいので一緒に行くとは言っているが、例えばそんな事例が実際に起きている。

私の田舎とかを考えると、歩道のないような、区切られているところがないような不安定なところがいっぱいあるので、実際には新宿を見ているとほとんどのところにガードレールで区切られた歩道があるような、非常に安心なところだというふうに、私は思う。にもかか

ならず、自転車に乗っちゃいけないとしたら、日本じゅうどこでも乗れないんじゃないかと思うのだが。

そういうようになった今の子どもを守らなきゃいけないというのに輪をかけているような気がして、ちょっと子どもの生きる力という、やっぱり自立するのと、それから本人がどう生きたいかという意味、そういうものも大事にしながらどうするかというのがやっぱり大事なんじゃないか。

もう一つは、例えば児童の保護者で、1年生から3年生が学童でやっているわけである。障害のある方は6年生もよろしいのだが、1年生から、親が例えば10時にしか帰ってこれないから、学校が終わったらすぐに塾に行きなさい、習い事に行きなさいと言って、週に3回も4回も習い事に行かせているようなことがごく普通に出てきている。それも、親の安心感からそういうことをやっているというふうに私は思う。子どもたちは一体どう思っているのかというのをやっぱり大事にしてあげてほしい。

保育園から学校へ行くと、一日じゅう学校で座っているわけである。そういう非常に苦しいことを味わっているのに、さらに塾に行けて、子どもにとって拷問じゃないかというふうに私は、親たちの集まりの中で言ったことがある。本当に生きたいと思っているかというのもあわせて、生きる力というのを、ただ安心・安全というのは、バランスがとれない。非常に偏っているような気がしてならないので、やっぱり部会なんかでも、ぜひそのことも一緒に話ができたらなというふうに思っている。意見という形である。

中山会長

今、親の安心感という言葉があったけれども、これが本当に子どもを自立させていくことにつながるんだろうかということは、十分互いに議論をしながら施策展開についても行っていくことが必要であるということ、私もいろいろ感じる。ぜひ部会の中でもそうした意見を闘わせていただきたい。

今度の次世代育成支援計画、前回はそうだったが、かなり問題提起型で、皆さんだれもが当事者になって考えていただけるような、計画でありたいと思っている。単にサービスを提供する計画ではない。ぜひそういった議論を願っている。

委員

今幼稚園と保育園が一緒になるということだが、保育園の待機児童というのは現在どれぐらいいるのかなと思った。お母さんが働きたいという今の時代に、待機の子どもたちがより安心で、そして近くに子どもを預かっていただけるところがあるのがとてもいいと思う。幼

稚園と保育園が一緒になってしまって、私立でしか預かる場所がない。そういうところで待機児童、幼児が安心して、お母さんがとても便利に利用できるようになっているのかどうかをお聞きしたい。

中山会長

保育園の待機児童解消というのは私も新宿区にとって、最重要課題として取り組んできました。平成15年度からの待機児童ゼロ作戦で、19年度にはゼロにしようと努力を行った。その間で五百数十名にわたる定員の拡大を行った。いっとき少なくなり、26名にまで減ったが、今6月時点で100名を超えるというような大きな状況の変化が起きている。私は、これは単に景気が悪いとかではなく、地殻変動だと思っている。そういった意味で、待機児童をなくしていくというのは、この新宿のまちにおける子どもが育っていくためのインフラ整備として、非常に最重要課題であると思っている。だから、他区と比べて新宿の待機児童は少ない。これは努力をしてきて、お金もかけてきている成果であるとは私考えている。

そうした中で、幼保一元化というのは待機児童の解消を行うとともに、親が働いているか働いていないかということにかかわらず、子どもの発達にとって必要な保育、教育を受けられることが重要である。総論的だが、そういった状況である。

待機児童の解消策については、新たに区の中にも部会を立ち上げて取り組みをしている。今年も4月に三栄町の四谷第三小学校の跡施設を利用して50名の新しい分園を開設し、それから東五軒町については隣地を買ったり、四谷の大京町の資財置き場に新たに園をつくることで、600名の定員拡大を図っていく計画もつくっている。

委員

今、子どもたちというのは本当にいろいろな環境の中で育っている中で、三つ子の魂百までとよく言われるが、我慢するというのを三つまでに覚えていくということがすごく大事だというのが今、私の中では基本として持っている。やっぱり隣に子どもを座らせて保護者会に出るとかいろいろな集まりに出るということの中で、子どもたちは座っていられるということを身につけていっているなというのを感じている。うちの子どもたちは保護者会するときには必ず横に座っていたのだが、ほかのやっぱり座らないでも済んでしまっているお子さんというのは、たまに座ろうとすると、どうして座ってなきゃいけないんだということで、座らないで、泣いて、ほかへ出してもらって自由になっていく。今、本当に小さいお子さん方の様子を見ていると、外で預かってもらえる、保護者会があるから、例えばいろいろな集まりがあるからということで、預かり保育というのがものすごく充実していると思うのだが、

これはお母さんにとっては本当に楽なことだと思うが、子どもたちにとってはその楽しさが一生続いてしまって、我慢するということが抜けているということの根源的な部分だと思っている。

だから、できればいろいろな意味で我慢できる子どもを育てられるような環境というのが本当に必要かなと。今大きくなった子どもを見て、我慢してくれているということを感じると、やっぱり3つまでの間に座っているのが当たり前だと、待っているのが当たり前だというような環境をつくってあげられる、またそれをお母さん方のほうで理解していく環境というのが大事なのかなと思っている。

早寝・早起き・朝ごはんで東京都のほうの取り組みが昨年、一昨年あり、そちらの委員をさせていただいていたが、やっぱり食べ物の脳の刺激とか、それから早く起きるとかっていう刺激について、6歳、入学前準備プログラムでこのビデオを見せることになったという報告を受けたが、6歳になったときには、お母さんが「これから自由になるわ」というところで、子どもたちにとってそのビデオを見せられても、もう既に固まってしまっている部分がどう影響してくるのかなというところでは、余り意味がないのかなと。できれば、本当にお母さんたちが子どもを育てる環境をつくっていかねばいけないんだと自覚するような段階で、そういうビデオを見せて、ああ、私たちにはこれだけの責任があるんだなということを実感してもらえるといいと思っている。

保育園と幼稚園が一緒になるということの中では、四谷子ども園のときにかかわらせていただいていたが、幼稚園のお母さんたちはお弁当をつくっていて結構コミュニケーションがあったものが、今度は給食になって、お母さんたちは給食に頼ってしまう。初年度のお母さんにはこだわりがあるが、新しく入るお母さんたちにはそういうこだわりはない。早く預けて、遅くまで預けて、さらにコミュニケーションがなくて、夕方慌しく買い物をして、夜寝かしつけて、子どもたちとの接触はどんどん少なくなっていくというのがすごく感じられているところである。その中で、お母さんたちに自覚してもらいたいのは、お母さんがどのくらい子どもたちにかかわっていくことが、この子が大きくなったときにギャップが出てくるのかということをお母さんたちにあらかじめ知っていただきたいなと。大きくなって、「何でこうなっちゃったのかしら」というのを「あなたがしたからよ」というのは、後から言っても仕方のないことなので、やっぱり我慢しなきゃいけないとか、あとは多少は危険な思いもしなきゃいけないという部分で、高い高いをすると三半規管が発達して逆上がりができるようになってくるというのにつながってくるというのも多分知らないで、3年生、4年生

になったら逆上がりはできるものだと思っていたというようなことが、後からわかる。

だから、そういう後からわかることではなくて、小さい頃にこういうことが子育てには大事なのだということをごわからせてあげられるような機会があるといいと思っている。

8 新宿区次世代育成支援計画（後期）の策定について 資料4

中山会長

新宿区次世代育成支援計画（後期）の策定について、事務局から説明をする。

事務局

新宿区次世代育成支援計画（後期）の策定について、具体的には先ほど設置を御了承いただいた部会で今後お願いする、本日は大きな枠組みと年間スケジュールについて説明をさせていただきます。

新宿区次世代育成支援計画（後期）の策定をするために、昨年度調査をさせていただきました。調査については、調査報告書概要版1ページ目にあるように、就学前の保護者調査、小学生の保護者調査、中学生の保護者、中学生本人、青少年ということで高校生に当たる年代であるがその本人、それから少子社会に関する調査ということで18歳から34歳までの区民の方で、対象を幅広くとり、対象者数も全部で5,000人の方に郵送させていた。回収率は全体で50%、保護者の方の回収率では60%を超える、皆様に御協力をいただいた。

その中で、子育てについての負担感とか楽しさ、どのような施策が必要だと思っているか、どういうことで困っているか、今の少子化というのは何が原因か、といったところを広く聞いた。

この調査と、私ども行政に携わっている中で日ごろの問題意識等をごかんがみながら資料4にある、次世代育成支援計画（後期計画）骨子（案）を、事務局として今日はお示しをしている。これについては、案ということで、今日の段階、また部会の中でさまざまな御意見をいただきながら練り上げていきたいと考えているので、簡単に説明をさせていただきます。

1ページ目は、全体の構成である。左側が前期の計画の構成、右側が後期の計画の案で、目次である。 番で計画の基本的な考え方を述べ、 番で現状と課題、今後の取り組みを述べ、最後に資料をつけるという、大きな枠組みについては前期の計画を踏襲したいと考えている。

2ページ目は、目的（ビジョン）である。前期の計画で御説明したときの図が上である。

下が今回、後期ではこのようにしたいと考えているが、1つ、 番の「ワーク・ライフ・バランスが実現するまち」、こちらを加えて4本の柱で支えていくことを考えている。少子化対策の中でいろいろな子育て支援策も大切であるが、仕事と家庭生活のバランスをとっていくことが少子化対策にとって非常に重要だと議論されているので、新宿区としても1つの柱に加えたいという案である。

3ページ目は、基本目標である。数値目標を掲げて「子育てしやすいまち」、産み育てたい人がふえることを目指すことは後期も変更をしないのだが、数値目標については、20年度の調査で、35.9と35.0という数値があったので、これを少しまたアップをし、26年度42%を掲げたいと思っている。この根拠であるが、就学前保護者の方のアップ率が1.45で、この先たくさん増えていくのは難しいだろうということで、この半分の伸び率で、約2割アップを目指し数値目標を掲げてみた。

4ページ目は、施策目標である。先ほどのこの計画の中の施策目標の隣に細長い楕円形があり、視点が書いてあったと思うが、その4つの視点は引き続き踏襲をし、5つの目標を掲げたいと思っている。

1番目に、「子どもの生きる力と豊かな心を育てる」を持ってきたい。

2番目については、前期の目標2の中に「親と子の健康づくり」というのがあった。これは区の中の整理であるが、健康部で健康づくり行動計画という計画があり、こちらも前期、後期というつくりとなっている。前期では親と子の健康づくり行動計画で議論されていたが、後期については次世代で議論をするという整理をさせていただいているので、目標として掲げてやっていきたいと考えているため、前期の目標2であったものが目標3に繰り下がっている。

そして、目標4には、前期の4と5、地域力、それから都市環境、ソフトとハードをまとめて目標4に「安心できる子育て環境をつくります」で掲げている。

目標5には、ビジョンの柱に1つ加えた「ワーク・ライフ・バランスが実現できる環境づくり」、これを加えて5つの目標にしたという案を現在持っている。

5ページ目、施策の体系で、この中に施策を整理していく。左側は行政計画の中で何々の充実、何々への支援という文言を使っている。後期については、よりわかりやすく、より興味を引くフレーズを取り入れて、区民の方が興味を持っていただいて、共感を覚えるように工夫したいと考えており、言葉を置いているが、まだまだ練れていないものである。また、行政計画だからこれまでどおりのほうがいいという御意見もあろうかと思う。これについて

は、本日事務局案で出させていただいているが、今後御議論いただきたいと思っている。

目標を変えたので、多少施策のぶら下がり方も変わるというのが矢印で引いている。

6 ページ目の次についている横長の骨子（案）というのが、これが全体を一つで見渡せるような形で配置しているものであり、4 つのビジョン、4 つの視点、5 つの目標、18 の施策、その右側に事業の例示である。

次に、スケジュールが資料5である。上が育成協議会、下が計画の流れで、本日の協議会で骨子案について、それから部会の設置について御了承をいただいた後、7月16日から9月3日あるいは17日まで部会で御検討いただき、10月の中旬から下旬に協議会を開かせていただき、部会で検討したものについて御協議をいただきたいと思っている。その後、パブリックコメントで、区民の皆様幅広く御意見をいただく機会を持つ。その折に説明会、シンポジウムなども企画していきたいと思っている。そこでいただいた意見をまた部会でたたき、最終案として調整していく。このような予定で、今年度中には策定を終えたいと考えている。

中山会長

次世代育成支援計画（後期）の策定のスケジュールをごらんいただくと、かなりハードである。そしてまた、非常に幅広の計画である。今日の案について、これから部会で引き継いでいただくので、例えば気がついたところをメモにして出していただき、多くの方々に共感を持っていただける、そして当事者となっていただけるような計画策定に努めたいと思う。

委員 5 ページ、6 ページの目標4のところ、「家庭・地域の子育て力・教育力をアップします」が「地域・家庭」を削って、ワーク・ライフ・バランスと兼ねて、「安心できる子育て環境をつくりまします」になったのだが、それが後期の計画案だと、目標は目標だが、具体的に1、2、3、4、5、1、2、3と並べてあるが、やはり家庭とか地域とかってという言葉在具体的に入れたほうが、私は計画案としていいんじゃないかなと思う。今は地域とか家庭とかっていうそういう言葉は使わないようになっているのか。

中山会長

そんなことはない。

委員

柏木なら柏木のその地域、四谷なら四谷と、言葉を入れて目標にしたほうが、具体的にその地域の方々にも、ああ、ないのなら、じゃ我々はいいいんだなという形になるような感じもするので、ぜひ地域とか家庭とかそういうような言葉を入れていただきたいと思う。

中山会長

わかった。今回くり方についても一つの案として出していて、皆さんになるべく御理解、共感いただけるものにしていくということで、御意見として賜る。

ワーク・ライフ・バランスについては、これは非常に大きな課題である。先ほど、それぞれの心構えが非常に重要だというお話があった。そういうことが非常に重要であることとあわせて、父親も含めて本当に子育てにかかわれるような働き方も十分考えていかないと、なかなか実現してこないのので、ワーク・ライフ・バランスのことについては大きな柱として立てていきたい。そういう中で、分かりやすく、なるべく柱が多くないほうがいいだろうということで5本とした。これまでの施策からまとめたので、非常に分かりにくいところがあると思う。「家庭や地域の子育て力・教育力のアップ」というほうが皆さんの心に届くところもあると思うので、十分御意見いただいて今後部会でも検討をしていただきたい。

委員

子どもの生きる力の中で、心とからだの栄養素 で遊びというのをに入れていただいたのは非常にいいことだと思う。私どもの子どもが育った児童館というの、前期計画から出ている矢印からいうところに入っているようだが、事業の例示の中に、かなり重要な遊びの発信基地である児童館というのが言葉として抜けているので、もちろん部会でも発言はしていくが、これはぜひ入れといていただきたいという思いである。

中山会長

ほかにいかがか。どんなことでも結構なので、御疑問な点とか、これはどういうこと、ちょっと違うと思うというようなことでも言っていただきたい。

委員

新宿区次世代育成支援に関する調査報告書概要版の22ページの一番最後のところだが、新宿区への愛着度というのが、中学生本人が「とても好き」、「どちらかという好き」というのが9割ぐらいある。私はすごくびっくりした。

とても好き。じゃ、嫌いなところはどこでいうところって。「どちらかという嫌い」、「嫌い」とかある人も、この辺のところはどういうことで嫌いなのかというものを、把握しているか。

これを私は見て、すごいなと。新宿って中学生本人がこんなに新宿区を好きって言うっていうことでしょう。

中山会長

ありがたい、うれしいことだ。やっぱり愛着や誇りを持ってもらうということが、そのま

ちの担い手となると思う。

実は、こういったところで、新宿が嫌いな理由というのを聞いてみると、一番多いのが「交通や買い物、遊びなどの施設が少ないから」、それが37.5%。同率で「自然環境が悪いから」というのが37.5%。これは意外と子どもの数が少なく、6人、6人とか、そういう数字である。次に、「治安が悪いから」というのが5人とか、「新宿の文化やまちの雰囲気嫌いだから」というのが4人いるとか、そういったところである。ところが、嫌いなところで「交通や買い物、遊びなどの施設が少ないから」が一番に挙がっているにもかかわらず、「とても好き」、「どちらかというが好き」と答えた人は、そういった同じ質問に対して、94人の人がこういうのがあるから好きだと言っているわけで、そういう意味では、この数字は私も非常に安心したというか心強く思った。

やはり、まちへの愛着や誇りを持っている子どもたちが多くいるということは、担い手になっていただけということではないかと感じた。

ほかにはいかがか。どんなことでも結構だが。この後、早速部会で十分な検討をしていただき、皆様方に秋になったら素案という形でお示しをしていきたいと思っている。

9 その他

中山会長

この案についてばかりでなく、こういったメンバーのところ子どもにかかわることで、皆さんと情報を共有しておきたい、もしくは発言をしておきたいということがあったら、発言をお願いしたい。

委員

部会が5回6回ある。必ずほかの部会の方以外の方には、また文書で来るのか。部会でこういうようなことを話したとか、例えばインターネットで流してもらおうということではできないか。こういうふうに資料で、今度の協議会は10月の中旬ぐらいか、そのぐらいのときに中間報告としてどんと持ってこられても。例えば部会の1番とか2番とか3番、2回か3回ぐらいやったところで中間報告の形でインターネットか何かで流してもらえれば、それを見て考えられる時間も与えられるので、そういうふうにはできないか。

中山会長

御意見として伺い、なるべく多くの方々に十分御理解いただけるようなことは、私たちとしても可能な限りしていきたいと思うので、検討させていただく。

何が課題となって、こういう方向で議論しているというような提供や、必要であれば、事務局に御連絡いただければ、議論に使った資料を提供するとか。事務方も非常に限られた人数で汗をかきながらやっている。そういったことでお願いしたい。

事務局

あと傍聴もできる。

中山会長

ほかにいかがか。どのようなことでも結構なので、ぜひ皆さんに。

委員

先ほど子ども園の話が出ていて、四谷子ども園のときに質問をした中で、今まで四谷第四幼稚園は園庭が広がったので、新しいところになると人数がものすごく増えるから園庭が小さくなる。そこを危惧していた。幼稚園の規約の中には1人当たりどのぐらいの園庭を確保しなければいけないという規律がある。だけれども、保育園にはマンションの一室でも行えるので、そういう規約がないという話があった。私も幼稚園の規則を見たら、幼稚園のお子さんにはある程度の園庭というものの面積が確保されている。でも、保育園というのには園庭の確保はないという規律があるので、実際180人からの子ども園の人数に対しても、この園庭は適当なものであると、ある程度確保されているということの説明があった。

今後また新宿の中で子ども園がどんどん増えていくということであれば、保育園と幼稚園が都合のいいほうの規約で決められていってしまうと、子ども園自体というのがどういう位置づけなのか難しいところでもあるのかなと思っていて、そういうふうに思っていた中に、愛日さんのお話があって、やっぱりある程度の確保がされていない部分での御提案だったと思うが、保育園と幼稚園、先ほどの所管が違うというところでの誤差みたいなものが、同じ一つの建物に入るに当たってはある程度議論していただいたほうがいいのかなというのを、四谷子ども園のときにちょっと感じたので。

今現在、四谷子ども園は、基本的には小学校の校庭が一緒なので特に問題はないのかなと思うが、小学校の校庭を使えない時期があったので、今はどうにか使えるようになったというふうに聞いているから、ある程度確保されていると思うが、教育委員会の方の認識の中で、1歳のお子さんは歩かないという説明をされたことがあって、でも1歳のお子さんはもう既に歩いている方が大勢いらっしゃる。そういう説明の逃げ切りはちょっと違うんじゃないのかなというのを、そのときに。今さらほじり返すのもあれだが。

今後増えていく中でそういうことの、やっぱり住民とのやりとりというのはすごく大事な

ことだし、子どもの環境を保育園のお母さんと幼稚園のお母さんで違う角度で見ているものを一つにしていくというものの難しさみたいなものについては、ある程度煮詰めておいていただいたほうがいいのかなどというふうに思っている。

中山会長

子ども園はどういった法的な位置づけになっているかという、三枚看板になっている。幼稚園としての基準も満たしている。それから、保育園としての基準も満たしている。それから、新宿区の子ども園としての基準も満たしているというような形で。

私は、子どもの状況が一緒になることによって悪くなるというような施設をつくることは新宿区としては全く考えていない。多数の子ども達がその中で多くの大人や地域に支えられて育っていけるような、それも親の就労状況やそういうことによって区別されるのではなく、総合的な場となるように子ども園を運営していきたいと考えている。だから、不十分な説明があったところ、御理解いただけなかったところは大変残念に思うが、そういった仕組みになっているということだけ御理解いただきたいと思う。

委員

次世代育成協議会の部会での「子どもの虐待防止と地域の役割」ということで、多分19年度と21年度で協議されたことだと思うが、これから部会が始まるところで、この部分というのはどうなるのかということと、それから特に配慮が必要な子どもの家庭への支援の充実ということがここに書いてあるが、それは十分に配慮されるのか。

中山会長

これまでの新宿区における取り組みをベースにしながら、どういうふうに現状に合わせ、他の機関との連携も十分にし、お力もいただきながら、新宿における子どもの特別な支援が、本当に手の届くものになっているかということ、今回のところでより進化をさせたいと考えている。だから、御意見等あったら、ぜひメモ等でも結構なのでお寄せいただきたい。

委員

学校のほうで放課後遊びというのを取り入れていただいております、小学校の子どもたちも真っすぐ帰らないで、もちろん最初に登録というのはあるが、登録させていただき、また学童に行っている子どもたちも親の許可で学校からまず保育園というか学童のほうへ行く。でも、ランドセルをおろして、家のようにすぐまた学校の校庭で遊べる。それが運動だけではなくて、囲碁だとかまたいろんなことでボランティアの人たちが遊んでくださったりという、家ではひとりっ子でちょっとかわりが持てなかったり寂しい思いをするのが、やっぱり縦社

会の中でいろんな友達と知り合えてできる。さっき三つ子の魂っておっしゃったが、怒られなくても怒られない家庭というのがあると思う。そういったところで、どれだけ親がサポートできたりとか、そういう場面を与えてくれて、できない部分はだれかがやってくれるようなやっぱりそういう環境、せっかくこの次世代というのがあるので、いろんなことを考えていけたらいいかなというのが私の感想である。

中山会長 今、御意見をいただいたのは、放課後子どもひろばということで、新宿区では毎年6校ずつ開設をしてきて、今18校になって、23年度までに全校で放課後子どもひろばを実施するというような計画で進めている。

家庭の機能が大きく変わってきている中で、どうやったら地域の中で子どもが健全に育つか、全体として生きる力をアップしていけるか、今回の次世代育成支援計画もより力になるものにしていきたいと考えている。

委員

区民への調査の中で、冒頭区長がおっしゃったように、「子育てが楽しい」というものが15年から20年を比較したときに大変アップをしているということと、それと同時に「つらい」と思っている者が逆に減少している。このことが、やはり新宿区が非常に積極的にやった結果であったというふうに思う。しかも、私がここ何年かかわりを持たせていただき、新宿区のやはりすばらしさというのは、それぞれの地域の中で実際に子どもや家庭とかかわっている方々が本当に当事者意識を持ちながら、何か行政から与えられてやるのではなくて、区民が自らできることが何かという、こういう姿勢が非常に色濃くあったことと、それから必ず具体的にこうしたらいいという、そういう提案があったことが、私はこういう結果を導いたのではないかというふうに思う。

しかし、中で、父親が母親と比べて子育て、そして家事にかかわる、ここが十分にできていない。これは全国的な状況であるが、ここのところがやはり次世代育成支援対策の行動計画等を考えるときに、大きなポイントであろうというふうに思う。区長が繰り返しおっしゃる、すべての人が当事者意識を持って。しかし、特に家庭の中では、もちろんひとり親家庭等も増加はしているが、父親、母親、そして家族がともに子育て・子育てにかかわることがとても大事だと思うので、この父親の家事、そして子育て参画というところを、やはり今回の計画でも具体的なものを考えていきたいというふうに思った。

それから最後に、先ほどは余りにも子どもの育ちを守る、あるいは他者に任せるといふ、こういう流れがあるというお話もあったが、私は子どももそれからそこにかかわる人もいず

れも主体者としての認識を持つということ、それから子どもがやはり長い人生の中でしっかりと生きていくためには、量の確保だけではなくて質の確保という意味で、その質の確保をするために、さまざまな観点から評価をしっかりとしながら施策を考えるということについて、ともすればやはり効率主義、できるだけむだなくという、こういう流れになりがちだが、子育て・子育てに関してはそうはいかないという、この質の部分をぜひ大事にしながら検討していければと思った。

福富副会長

長いこと、このようなかわりに参加をさせていただいて一つだけつくづく思うことが、子ども大人あるいは教師も親も、子どもを悪くしようとか、子どもをだめにしようとかいう意識は全然ない。皆さんがそれぞれ子どものために何とかよくしよう、よくしようということ、これは本当に純粹だろうと思う。ところが、ここで一つ怖いことは、それが大人の目線というか、よかれと思ったことが本当に子どもにとっていいこと何だろうかという目線をちょっと振り返ってみるということ、ついつい一生懸命になればなるほど忘れてしまう。これはとても怖いことなのかなと。こういうかわりをずっと持ち、つい、こんなに僕は一生懸命やっているのになぜわかってくれないのかって、わかってくれない相手のせいにしてしまうということが多々起こってくる。そのところを、部会でも少しフィードバックしながら考えるような部会に持っていったらと思っている。

前回以上に増して、今期も、どうぞ部会の皆さんの御協力をお願いできたらと思う。どうぞよろしくお願いいたします。

中山会長

閉会挨拶

午後4時00分閉会